個人句集序説

―個人句集の誕生から流行まで―

三原尚子

一．はじめに

近世中期以降、ある単独の俳諧作者の発句を掲載した句集（以下、個人句集と称する）が多く刊行された。例えば、のちに正岡子規が賞品を付してまで欲しがった『蕪村句集』が有名であるが、蕪村門の人々のほかにも、淡々、千代尼、也有、蓼太ら、著名な俳人たちの句集が次々と刊行された。中興期以前はごく少数の例外を除いて刊行されていなかった個人句集が、ある時期を境に、次々と刊行されていくのである。これは検討すべき事象であろうが、個人句集について概観する先行研究は、管見の限り見あたらない。

確かに、それぞれの発句が当初、どの撰集に、どのような並びで掲載され、どのような形で読まれたかということは非常に重要なことである。しかし、先に挙げた『蕪村句集』に対する子規の熱意を見ても、また近代以降に近世期の個人句集が多く翻刻・刊行されたことから見ても、個人句集が近代以降の俳諧に与えた影響は大きいと言える。また、近世期の個人句集がそれぞれ何部ぐらい刊行されたかは不明であるが、現在も近世期の個人句集が多く残っている[1]ことや、続編が出版されている例も多いことから、近世期にも近代同様に、個人句集に対する需要は高かったものと推測される。つまり、個人句集刊行が俳諧に与えた影響は無視できない。そもそも、影響力の有無に関わらず、個人句集の性質（刊行の時期、刊行の目的等）の検討もなされないまま、放置されていること自体が問題であろう。

本稿の目標は、個人句集についての諸問題を論じる第一歩として、個人句集について概観することである。なお、個人句集

について考える上では、自筆句帳のような未刊行の句集も重要であるが、刊行され流布した句集の方が後世に与えた影響が大きいことから、本稿では刊行された句集に範囲を限定し、また単に「個人句集」と述べる場合も、刊行された句集のみを指すものとする。

最後に、「個人句集」という呼称について触れておきたい。最初に述べたように、「個人句集」とは、ある単独の俳諧作者の発句を中心に集めた句集のことであり、近世期には「発句集」（『蕪村句集』田福跋）や「家々の句集」（『蘿葉集』暁台跋）など様々に呼ばれていた。このような句集には、その作者の文章や他の作者たちの発句、複数人で巻いた連句などが掲載されることもあるが、その場合も、主眼があくまで単独の、ある特定の作者の発句であれば、「個人句集」に分類することとする。また、現在に到っても、「個人句集」という言葉は確立された用語ではない。例えば、『俳文学大辞典』「句集」項（山下一海・尾形仂執筆）では、同様の句集が「家集」「個人句集」「個人発句集」など複数の呼称で呼ばれている。本稿では、「合同句集」との対比から、「個人句集」という用語を用いることとする。

なお、本稿で個人句集の「作者」と呼ぶのは句集に収められている発句の作者、「編者」と呼ぶのは句集を編集した人物のことである。

二．個人句集の始まり

先に引用した『俳文学大辞典』「句集」項では、俳諧の個人句集の早い例として、定環の『犬俤』を取り上げるが、これは写本である。版本としては、立圃の個人句集である『そらつぶて』が管見の限りでは最も早く、少なくともごく初期の個人句集であることは間違いなかろう。[3] まずはこの『そらつぶて』を取り上げ、個人句集の誕生について考えてみたい。

まず、『そらつぶて』の基本的な事項について見ておく。現状では『俳文学大辞典』「そらつぶて」項（母利司朗執筆）が、『そらつぶて』についてもっともまとまった考察といってよさそうなので、以下に引用する。

そらつぶて　俳諧発句集。大二。立圃著。慶安二（一六四九）・五、自跋。初版は無刊記。別に寛文三年（一六六三）一〇月、京都山本五兵衛刊の後刷本がある。自筆版下。立圃の自選発句集。句数三七五。うち一七六句に前書があるが、そのうち七〇余句は俳文としての分量をもち、初期俳諧における俳文成長の様相をうかがう好資料。これらの多くは画賛・

短冊・絵巻物などのかたちで人のもとめに応じ与えたものと思われ、（中略）画題を示す前書も少なくない。（後略）

『そらつぶて』は立圃（一五九五―一六六九）の生前に刊行された句集であり、自撰句集である。詳しくは後述するが、これは後に刊行される『泊船集』などとは違った特徴である。まずはこの点に注目しておきたい。

『俳文学大辞典』にも記されているように、『そらつぶて』は発句集であるが、文章が長い前書が多い。具体的には、以下のような様相である。[3]

けふといへば、もろこしまでもゆく春なれど、名にしおふ日の本の影こそ長閑にはあなれ。（中略）まことに花やかなる御世の春なりかし。

世さかりやうへした〳〵も花の春

筑前国宰府にて

もち花をけふ宰府の神のぬさ

紙幅の都合上省略したが、「世さかりや」句の前書は百五十字ほどもある。このような長文の前書や、「もち花を」句の前書のように、場所に関して言及する前書が、『そらつぶて』には非常に多い。

『そらつぶて』は、体裁の面では、俳諧撰集や後世の個人句集と同じく、前書の文章部分が発句よりも二字下げて書かれており、一般的な句集と同じ形態であると言える。しかし、文字下げを無視して見てみると、従来の旅行記、日記の文章形態と似通っている。そのような文章形態であれば、自分の発句を自分で配置するのは、至極当然のことである。また、旅行記や日記ならば、生前に刊行することも既に例がある。[4]

『そらつぶて』は、従来の文章形態を活かしつつも個人句集という形式を実現した作品である。しかし、のちの個人句集とは異なり、あくまで文章とのつながりの中での発句、あるいはある特定の場面における発句を鑑賞するものとして受容されたのであろう。

不思議なことに、『そらつぶて』以後、芭蕉の個人句集である『泊船集』刊行までの間、形態の如何を問わず、個人句集が積極的に刊行された様子は見られない。そもそも、発句はあくまでも連句の一部であり、発句単体での鑑賞は需要がなかったと考えることもできるが、それでは『そらつぶて』が刊行され、しかも後刷本まで存在することの説明にならない。今見たように、『そらつぶて』は個人句集という新しい可能性は示したが、その形態から、むしろ俳諧における紀行文や、句日記などに派生していった可能性が高いのではないだろうか。

事実、一般に貞門の作者と言われている貞徳・重頼・季吟らについては、季吟の『いなご』[5]が個人句集といえるぐらいで、同集を含め、よく読まれた個人句集はないと思われる。詳しくは次節で取り上げるが、個人句集は『泊船集』刊行によりひとまず復活する。しかしその頃には、貞門の句集に対する需要が落ち込んでいたのだろう。

一方、談林の作者の句集も、『泊船集』より早いものは管見の限りないが、その後、言水の『初心もと柏』（自撰）が享保二年（一七一七）に、来山の『いまみや草』（古道ほか編）が享保十九年（一七三四）に刊行された[6]。なお、『初心もと柏』は、言水（享保七年〈一七二二〉没）生前に刊行された自撰句集であり、自身の句を並べるのみならず、ほぼ全ての句に自注が付されているのが特徴である。

談林の祖である宗因の句集は、『むかし口』（秋成編）が安永六年（一七七七）刊、『梅翁宗因発句集』（素外編）が天明元年（一七八一）刊と、ともに宗因没後百年近く経ってからの刊行である。これは、個人句集刊行が盛んになった時期に、宗因を慕っていた秋成や、談林七世を名乗った素外らが存在したことで実現したものである。なお、談林の個人句集には、他に、才麿の句集『狂六堂才麿発句抜萃』（素外編、天明六年〈一七八六〉刊）もある。

三．個人句集の再興

『そらつぶて』や『いなご』のような例は見られるものの、個人句集時代の本格的な始まりは、『泊船集』刊行以降ということになる。本節では、芭蕉のもっとも早い個人句集であり、後の芭蕉句集編纂に影響を与え続けた、『泊船集』について見ていきたい。

なお、芭蕉の個人句集については、萩原恭男『芭蕉句集の研究』[7]に詳しい。ただし、同書では『泊船集』をはじめとした各句集の内容、成立等について詳細に研究を行っているものの、芭蕉句集以外に関する目配りはない。本稿では、後者に重点を置きたい。

さて、『泊船集』は風国編（すなわち他撰）、元禄十一年（一六九八）刊で、芭蕉没後かなり早い時期に出版された句集である。この『泊船集』は、誤字・脱字が多く、杜撰であることを理由に、許六や支考から非難された[8]。

支考による『泊船集』批判は、「風雅の名くだしたるも、先賢をはかるべき其身の修力にたえざらん」（『そこの花』）とい

うものである。つまり、風国が新参者であるにも関わらず句集を編んだことに対しては非難をしているものの、それは、芭蕉の句集を編んだこと自体に対する非難ではないのである。これは、『宇陀法師』における許六の批判においても同様である。『そらつぶて』以降、個人句集が刊行された形跡はなかったが、個人句集の刊行自体に対する忌避感があってそうなったわけではないことがわかる。

では、なぜ『泊船集』という個人句集が編まれることになったのか。一見すると唐突に個人句集が復活したようだが、実際はそうではない。その前段階として、芭蕉の死後、門弟たちが芭蕉句の蒐集を行い、それらを掲載した撰集を刊行し始めた。『有磯海』、『芭蕉庵小文庫』などがそうである。[9] このような芭蕉の発句蒐集活動の、ひとつの完成形が『泊船集』であると推測される。

『泊船集』の編集に対する姿勢は、編者である風国自身の序文[10]に明らかである。

（前略）先師の詠草遺稿、旅泊の書すて、津々浦々にすくなからず。今拾ふとも尽く得べからず。只集に出、或は人の耳にのこりけるほ句を拾ひ、多くは新古をわかたず、尤、同士の家にかくせる遺章一行ももとめず、『細道』にのこりけるはかかげず、集て泊船堂の遺稿のひとつとなしぬ。僕つたなき筆につらね侍れば、魯魚の事は見る人校正したまへ。其連歌の遺韻、文章・道の紀若干今さし置ぬ。尚国々にのこれる家珍もよりより出したまへかしとしかいふ。

芭蕉の句には書き捨ての句が多く、全てを蒐集することは不可能としながらも、撰集等に残る芭蕉の句を集めたと風国は述べる。門人（「同士」）秘蔵の句や『おくのほそ道』に収録されている句を除いているとはいえ、「新古をわかたず」という言葉からは、新旧を問わず、広く句を蒐集し、遺そうとする意識が伺える。

また、興味深いのは「魯魚の事は見る人校正したまへ」「尚国々にのこれる家珍もよりより出したまへかし」という、読者への呼びかけである。撰集であれば、一読者が校正する、あるいは、一読者が補訂するという事態はめったに起こりえないだろうが、個人の作品を集めた句集であれば、そのような事態が起こりうると考えたのだろう。この文言からは、刊行を急ぎ、その代わりに読者による訂正を厭わない、風国の姿勢が伺える。

風国が『泊船集』の刊行を急いだ理由は何であったのか。それは、「国々にのこれる家珍もよりより出したまへかし」という文言と、『おくのほそ道』の句を収録しないという編集方針

からわかるように、各撰集に掲載されている芭蕉句の散逸を防ぎ、また全国の門人たちに、まだ知られていない芭蕉句の蒐集を呼びかけることであろう。この場合、句集が刊行され、全国に持ち運ぶことが可能になるということは、大きな意味を持っている。また、核になる句集が刊行されているなら、それを補訂することは、一から句集を作り出すことよりも容易である。このような理由で、没後早い時期に、大部の句集を刊行したのではないだろうか。後の『芭蕉句選』（華雀編。元文四年〈一七三九〉刊）も『泊船集』を基にしていること、『泊船集』を否定した許六たちが、結局はそれ以上の句集を編集できなかった[11]ことを考え合わせると、風国の試みは、まずは成功したといってよいだろう。

芭蕉句の蒐集を第一の目標とする『泊船集』は、前節で見たように、自撰句集であり作者の生前に刊行された『そらつぶて』や『いなご』とは性質が大きく異なる。やはり初期俳諧における個人句集と『泊船集』の間には断絶があり、個人句集の再興のきっかけとなったのは、芭蕉とそれを慕う弟子たちの存在であるといえる。ただしその後、個人句集刊行は再び下火になる。以後のことは次節以降で述べたい。

四．蕉門高弟たちの個人句集

『泊船集』後の空白期間ののち、ある時期から個人句集は一気に刊行され始める。この時期以後の個人句集は、二つに大別できる。一つは蕉門の高弟や、第二節で述べた談林の作者たちなどの個人句集であり、作者没後かなりの年月を経て刊行された句集とも言い換えられる。もう一つは、作者の生前、あるいは没後すぐに刊行された個人句集である。論文末尾に表1としてまとめたのは、前者のうち、特に蕉門の主要なもの、表2としてまとめたのは、後者のうち主要なものである。

まず述べておかなければならないのが、本節冒頭で述べた「ある時期」というのはいつかということである。

管見の限りでは、個人句集刊行ブームの先駆けは淡々の個人句集である『淡々発句集』であるが、同集は延享三年（一七四六）序の版本である。さらに、寛延二年（一七四九）には貞佐の個人句集『桑々畔発句集』が刊行された。刊年が確定できない個人句集、例えば祇空の『くち葉』や乙由（麦林）の『麦林集』も、ほぼ同時期の刊行であると推測されている（表2参照）。また、蕉門高弟の個人句集も同時期に刊行され始めた（表1参照）。具体的には、蕉門高弟の個人句集のなかで最も早い其角の『五

元集』が、延享四年（一七四七）に刊行されている。よって、個人句集刊行のターニングポイントは延享年間ごろであるといえる。

また、表1、表2を比較すれば明らかだが、延享期以後も、本節冒頭で分類した二種の個人句集刊行は、同時並行で行われている。言い換えると、蕉門高弟のめぼしい個人句集が刊行され終わったから、現存作者の個人句集を刊行し始めた、というような単純な影響関係では説明がつかない。もちろん、『泊船集』などにより、個人句集という形式が既に周知のものとなったことは中興期の個人句集流行に影響を与えている可能性があるが、それでも、これほど急に刊行が行われるようになることの背景には、何らかの時代的な要因があると考えなければならない。この点については、次節で触れることとする。

今述べたように、二種の個人句集が同時期に存在したことは事実であるが、まずはそれぞれの性質について見ておく。本節では、表1にまとめた、蕉門の個人句集について見ていきたい。

まず、表を一瞥してわかるのが、これらの句集が全て作者没後に刊行されており、さらに、各人の没年と刊行年に関連性がないことである。特に、芭蕉晩年の弟子で、芭蕉没後長く生きた支考や野坡の句集が、比較的早期に刊行されていることに注目したい。支考・野坡より先に句集が刊行された其角や嵐雪もそうであるが、支考や野坡には弟子が多くいて、刊行当時まだ活躍していた。俳諧において個人句集を刊行するのは作者の弟子たちの場合が多く、句集刊行の時期と弟子の活躍には関連性がある[12]。

また、芭蕉と同様に、蕉門俳人たちも自撰句集を刊行した形跡はない。先述の通り、『そらつぶて』や『いなご』、あるいは第二節末尾で取り上げた『初心もと柏』は生前に刊行された自撰句集ではあるが、これらにより自撰句集が定着することはなかった。表に挙げた蕉門の個人句集の中で、元は自撰で、しかも唯一生前に刊行される可能性があったのは其角の『五元集』であるが、これも結局没後年月が経てからの出版となった。作品自体の評価はともかく、刊行以前に個人句集というものの概念を変えることはなかったはずである。

『五元集』ならびに『玄峰集』は、他の蕉門の句集に先駆けて出版された集であるが、序跋の内容から編集意識を伺うのは難しい。一方、支考の『蓮二吟集』と野坡の『野坡吟草』には、個人句集刊行と弟子の活動との関係について考えるヒントとなりそうな記述がある。

『蓮二吟集』の編者一浮による序文[13]は以下の通りである。

蕉門世に多き中にも、美濃丶支考は、釈門を出て文才秀たり。諸国を俳行脚し、翁の正風体を遠鄙に演説して広く知らしめ、其雅詠を化度し侍る事幾ぞや。さるに此人の生涯の句撰を、いまだ見ざるもの本意なきよし、書林春秋堂是を求めむと乞ふ事年あり。いなみがたく約し、かなたこなたより彼の句々をひろひ、蓮二吟集と上書して贈る物ならし。

序文では、まず、支考が蕉風俳諧の普及にとっていかに重要であったか述べる。そして、にもかかわらず支考の句集がないことを書肆が嘆き、一浮に編纂を依頼してきたため承諾したという、句集刊行の経緯が語られている。句集を刊行することを書肆の方から求めてきたということは、支考の個人句集に対する需要が存在したということである。

続いて、『野坡吟草』における、編者文下の跋文[14]を見ておきたい。

蕉門二世無名庵高津野々翁（稿者注：野坡の別号）の詠吟、一千余句を拾ひ集めて四季四冊となし、門人亡父風之一集を思ひ立しに、事ならずして身まかりぬ。其志を継で梓にちりばめむとするに、手爾於葉の紛らはしきと、句帳に墨を引れしとを暫く除きて、今九百卅余吟を顕はす。猶落たるを揚、捨れたるを拾ひて、後篇の望みあり。願くば同好子、志を助けて洩たる句をあたへたまはゞ何の幸如」之。

まず注目したいのが、「同好子」に向けて叱正を求めていることである。文章の内容をふまえると、「同好子」は、『泊船集』における「同士」同様に、支考や野坡の門人たちを指すと考えられる。このような書き方は、先に見た『泊船集』序文とよく似ている。

ただし、芭蕉句の蒐集を志して刊行された『泊船集』と、序文において「句撰」と明言している『蓮二吟集』、あるいは、元の句帳から句を削減して刊行した『野坡吟草』とでは、刊行の目的が微妙に異なっているのではないか。後者においても、句を遺すことは目的の一つではあろうが、主眼が置かれているのは、あくまで支考や野坡の句の中から優れているものを撰んで刊行することであり、またそれを通じて、支考や野坡について広く世に知らしめることであろう。

先に句集刊行の時期が早いことと弟子の活動との間に関連性があることを指摘したが、それは単に、句集を刊行するのが弟子であるからというだけではない。弟子が多く、全国にその門派が広がれば広がるほど、まとまった形で師匠の句を読むことのできる媒体、すなわち刊行された個人句集が必要となるから

でもあろう。特に支考や野坡は広範囲に一大勢力を抱えたので、持ち運びができ、手に取りやすい句集が求められていたことが、句集刊行の背景にあるのではないか。

『野坡吟草』刊行から十五年後に刊行された『去来発句集』・『丈草発句集』序文[15]において、いま立てた仮説を証明するような言説を、蝶夢が残している。

（前略）其角・嵐雪は風雅を弘むるを業とし、もはら名利の境に遊べば、またその流れを汲む輩も多くて、其角に五元集、嵐雪に玄峰集などいへる家の集ありて世につたふ。さるを去来・丈草は、蕉翁の直指のむねをあやまらず。風雅の名利を深くいとひて、たゞ拈華微笑のこゝろをよく伝へて、一紙の伝書をも著さず。一人の門人をもとめざれば、ましてその発句を書集べき人もなし。（後略）

蝶夢は、本稿で取り上げた『蓮二吟集』・『野坡吟草』ではなく、『五元集』・『玄峰集』を引き合いに出しているが、やはり「家の集」すなわち個人句集が存在することは、「風雅を弘むるを業とし」「その流れを汲む輩」が多いからであると述べている。やはり、個人句集刊行と弟子の有無には関連性があり、さらに、本節で述べたとおり、弟子がいることが様々な面で個人句集に対する需要を生んだといえるだろう。

五．中興期前後の作者たちの個人句集

前節では、蕉門高弟らの個人句集について見てきた。本節では、中興期前後の作者たちの個人句集について、可能な範囲で概観していきたい。

まず、前節で見た句集はすべて作者没後の刊行であった。しかし、本節で取り上げる句集には生前刊行のものが多い。例えば、前節で挙げた『淡々発句集』は、淡々生前に刊行されている[16]。

基本的には、生前に個人句集を刊行することに対し、編者たちに忌避感はなかったと見てよい。例えば、今挙げた『淡々発句集』にも、他の生前刊行の句集（例えば『千代尼句集』など）にも、生前刊行に関する言及はまったくない。さらに、死後に刊行された句集や、草稿のまま留め置かれた句集の中にも、本来は存命中に刊行が予定されていたものがある[17]。

前節で見た蕉門の個人句集が、作者たちの生前に刊行されなかったのも、生前刊行自体が忌避されていたためではないだろう。なぜなら、延享期以前に生前刊行がタブー視されていたなら、生前刊行黎明期の句集には、生前刊行の「言い訳」が記されているはずだからである。それがないということは、生前・

没後という刊行時期の区分は、そもそも問題になっていなかったと考えるのが自然である。また、やや特殊な集であるとはいえ、生前刊行の個人句集に分類できる『そらつぶて』等に対する目立った批判がないことも、当時の人々が句集の刊行時期についてあまり意識していなかったと考える根拠である。蕉門の個人句集がすべて没後刊行なのは意図的なものではなく、単に個人句集を刊行するという意識自体がなかったからであろう。

ただし、ある俳人が自身の句集刊行自体を拒否し、その結果、生前の刊行はできず、弟子たちによって没後刊行されたと言われる例はある。極端な例では、吏登は自撰の十八句のみを残し、他の句を全て焼却させた。[18] このように、本人が生前に個人刊行を拒んだ事例には留意すべきだろう。

また、生前の刊行とはいっても、おおむね作者が還暦を迎えたあとの刊行であることには留意したい。ほとんどの作者が句集刊行以後何年も生きて、場合によっては句集の続編や拾遺編を刊行しているが、最初の個人句集を編纂しようとする場合、その作者の俳諧活動を振り返り、それをまとめることは、大きな目的の一つであると言えるだろう。

目的といえば、第三節では『泊船集』、第四節では『蓮二吟集』と『野坡吟草』の二集を取り上げ、それぞれの刊行目的について見た。これらの句集の刊行目的と、本節で取り上げる句集の刊行目的には、何か違いがあるのだろうか。

中興期前後の作者の個人句集の序跋には、様々な刊行の目的が記されている。以下に大別して挙げておく。

①作者の句を蒐集し、散逸を防ぐこと

『泊船集』に見られた目的意識であり、前節では挙げなかったが、『杉風句集』などにも同様の意識が見られる。

現存作者の句集でも、例えば『千代尼句集』蘭更跋[19]に、以下のようにある。

（前略）無外庵のぬし（稿者注：編者既白の別号）、したしみ深く、遠近にちりみだれたる句を書あつめぬれば、をのづからすける人々のかゞみともなるべき事おほければとて、しきりに桜木にちりばめて、千代尼句集と題するもの也（後略）

ただし、この時期の作者たちの句集であれば、生前あるいは没後すぐに刊行されるうえに、個人句集刊行が当たり前になってからは、刊行を意識して手元に発句をまとめておくこともなされたのではないだろうか。そのため、このような記述はあまり見られない。

②句集を通じて、その作者の句、さらには作者の名を知らしめること

明言されてはいないものの、『蓮二吟集』・『野坡吟草』にこのような意識が見られることは、既に前節で指摘した。

作者を褒め称える文言は、編者にとっては書きにくいこともあったようで、例えば『蓼太句集』[20]月巣跋には「雪中庵主の句〳〵桜木に移すよし聞ふるに、其流れ汲我輩の、さすがによしともあしともいふべきにはあらねば」とある。それでも、作者を褒める表現はよく見られ、例えば也有の個人句集『蘿葉集』[21]達下序には以下のようにある。

（前略）尾の蘿葉君は（中略）武に長じ文に富み（中略）百州耳を傾け、万家筆を染て、鶴望漸年ありける。さるが中に遠く伝へほのかに写て、まゝ手爾遠波を違ふの類予が耳にさへ両三句もありて、（毫釐に句情を模糊せるをかなしみけるもまた久し。（後略）

③作者の句を手本にしたいと思っている人たちの便宜を図ること

②と関連する意識である。例えば①に引用した『千代尼句集』跋の後半部分や、『蘿葉集』の後序の、「是を梓して後鑑たらしめん」にこのような意識が見て取れる。

④流布している句の誤りを正すこと

②に引用した『蘿葉集』序文の「まゝ手爾遠波を」以下からわかるように、現状流布している句形には、てにをはの誤りが多いので、それを訂正するために刊行したと記されている句集は多い。例えば、『麦林集』後序[22]には「其吟行都鄙に伝へ、梓に彫刻するを見るに、手爾遠波の違る事すくなからず」、『暁台句集』の跋文[23]には「誤りをつたふる事、三に一つは師の本意を失へり。今其誤を正しさとしめむと、天地の二巻を著す」とある。一方、蕉門の句集では既に正しい形がわからない句が多いためか、このような意識は見られない。

⑤（時に何らかの節目にあたり）作者の俳諧活動を振り返り、まとめること

先述のとおりである。生前刊行のきっかけについては名言されていないことが多いが、例えば存義の『古来庵発句集前篇』は還暦記念の集である。また、没後の刊行については、作者の年忌にあたる年に個人句集を刊行する例がある。例えば『夜半

亭発句帖』『蕪村句集』などである。特に蕪村周辺の作者の句集にこの傾向が強い。

重複する部分や判断に迷う例もあるが、おおむね以上の五種に大別できる。前節で見た句集と共通する部分もあるが、同時代に刊行されているにも関わらず、異なる部分もある。各項目の中に記したとおり、それはそれぞれの句集の性質の違いによるものであろう。

問題は、なぜ唐突に、このような目的意識のもとで個人句集が刊行され始めたかということである。この点については、当時の人々が書き残していないため、明確な理由はわからない。ただ、俳諧の中心が連句から発句に移り変わっていくなかで、高名な作者の発句をまとめた集や、手本にできる集に対する需要が高まっていたのではないか。先述②・③に挙げた記述は、そのような意識を反映して記されたものと考えられる。

また、⑤については、俳諧において何らかの企画を行う場合、本来は門人一同が力を合わせて成し遂げることが多かったはずである。例えば一般的な追善集では、故人の発句よりもそれ以外の人が詠んだ発句の方が多い。還暦祝いの集にしても、皆が集まって句を寄せる形式が多かったはずである。このような集の代わりに個人句集が刊行される例が発生したことについては、俳諧の性質の変化を考えるうえで重要であるが、この点については稿を改めて論じたい。

最後に、現存作者たちの個人句集の性質を考えるうえで重要な、自撰・他撰という区分について述べておきたい。

前節で見た蕉門の句集は、没後一定の年月が経過してからの刊行であり、『五元集』のような例外を除いては自撰句集である可能性はほぼないが、作者生前の刊行であれば自撰と他撰、いずれの可能性も考えられる。

まず表2から一般的な傾向を見ておくと、自撰句集が徐々に増えていくように見える。しかし、表2では、序跋の内容等から自撰であることが明白であるものだけを自撰としているため、実は、表2からわかるのは、自撰を謳う句集が増えていくことだけである。一方で、表向きは作者とは別の編者が存在するが、実は作者が編集に関わっている例は多いと考えられる。

例えば『蓼太句集』序文には、以下のようにある。

（前略）予が師雪中庵の主蓼太は、（中略）あるは山ふかき白霧に憂をしのびし口ずさみ、つもりつもれり。さるを書肆何某、梓にちりばめんと子規亭の扉を敲く事、三たび五たびをかさぬ。師云、「（中略）いぶせき藻塩草かきあつめ

ては、人のみるめもいたつかはし。さればとて、ひたすらに拒めるも又事がまし。聊其需を塞げよ」とて、十が一をあたへられし趣を吐月述。

「子規亭」は編者吐月の庵号である。つまり、蓼太の句集刊行を求めて、書肆が編者吐月を頻繁に訪ねたため、吐月が師である蓼太に相談したところ、蓼太の句のうち、「十が一」を与えられたということが述べられている。「十が一」という言葉から、吐月に与えられたのは、蓼太の方であらかじめ選別した、句稿のようなものであったと考えられる。この場合、たとえ刊行の際に実際の編集作業にあたったのが吐月であったとしても、句の選別という非常に重要な作業を行ったのは蓼太本人ということになる。よって、『蓼太句集』は一見他撰句集であるものの、自撰の要素が強い句集であると言える。『蓼太句集』だけでなく、やや時代が下るが、士朗の個人句集『枇杷園句集』についても同様であることが明らかになっており、[24] このような句集は他にも多くあると考えられる。[25] 個人句集における自撰・他撰の別は、各句集の内容を十分に検討しなければ結論が出せないため、個人句集全体の概説を目的とする本稿では、これ以上触れることはやめ、この点についても稿を改めて論じることとする。

六. おわりに

最後に、本稿で述べた内容をまとめておく。初期俳諧においても『そらつぶて』のような刊行された個人句集は存在したものの、それが一般化することはなく、その後、『泊船集』という形で再び世に現れることとなった。しかし、その後もしばらくは目立った個人句集はなく、にも関わらず、延享期に到り、おそらくは時代の要請を受けて、没後長く年月が経った作者の句集と同時代の作者の句集が、同時並行で刊行され始めた。また、生前刊行・没後刊行、自撰・他撰の区分が非常にあいまいであることも指摘した。

俳諧研究においては、作者本人が意図した句形が重視され、後から編纂される個人句集については、あまり顧みられることがなかった。しかし、句形の誤りを正すために出版された句集も多く、単に後から出されたからという理由で個人句集を軽んじるのは誤りである。このように、個人句集について概観するだけでも、現状の個人句集に対する理解には不十分な点があることがわかる。

とはいえ、本稿では、句集刊行の目的や、その背景にある、

俳諧における需要の変化については、まだ十分に検討できていない。また、個人句集刊行の問題は、独吟集の流行や、和歌における家集刊行の歴史からも論じるべきであり、この点についても更なる研究が必要である。

また、各門流における個人句集の性質の違いについて見ていくことも必要である。たとえば、句集を積極的に刊行した作者とそうでない作者には、何らかの違いがあるのだろうか。今回示した表を見るだけでも、流派によってある程度傾向があることはわかる。例えば、乙由の句集『麦林集』、その門人である千代尼の『千代尼句集』は、どちらも早い時期に刊行された個人句集である。また、蓼太は自身の句集を刊行したあとも、門人大江丸の句集刊行に積極的に関わっており[26]、蓼太が個人句集刊行に前向きであったことがわかる。

さらに、前節で触れたとおり、蕪村周辺では、追善の折に個人句集が多く編まれている。蕪村門では『鬼貫句選』、また個人句集ではないが、五人の大家の個人句集を合体した形の『俳諧五子稿』なども編まれている[27]。俳諧における顕彰について考えるうえでも、個人句集の研究は必要であろう。

〔注〕

（1）　例えば、蕪村の例を見ると、『蕪村句集』は、日本古典籍データーベースに登録されているものだけで二十冊以上現存が確認できる。これは『蕪村七部集』あるいは『蕪村七部集』に含まれる八つの撰集のいずれの現存数よりも多い。もちろん現存数だけで重要度が計れるわけではないが、広く流通したことは見て取れる。

（2）　先に引用した『俳文学大辞典』「句集」項では、近世前期に刊行された個人句集は『泊船集』所収「芭蕉庵拾遺稿」のみとするが、『そらつぶて』も該当する。ただし、これから述べるように、『そらつぶて』はやや特殊な句集であり、そのため例外として分類しなかった可能性はある。

（3）　引用は、『俳諧珍本集』（『俳諧文庫』第十八編）による。ただし、私に体裁等を整えた（以下、全て同じ）。

（4）　例えば、林羅山の『癸未紀行』は正保二年（一六四五）刊で、羅山生前の刊行である。『癸未紀行』は漢文で記されているものの、随所に長文の前書（二字下げ）を伴った漢詩が織り込まれており、形式的には『そらつぶて』に似ている。また、木下長嘯子の歌文集である『挙白集』刊行が、『そらつぶて』刊行と同年の慶安二年であり、個人の作品を刊行することが

一般的なことになりつつあったとも考えられる。

（5）『いなご』は明暦二年（一六五六）刊の自撰句集である。ただし、同集は「絵俳書の嚆矢」（『俳文学大辞典』「いなご」項〈榎坂浩尚執筆〉）と言われており、一般的な個人句集とは異なる。

（6）『いまみや草』は、長文の前書が多い点で『そらつぶて』に類似しているが、長文の前書の場合は句の方が二字下げになっている点が独特である。

（7）笠間書院、1971。

（8）ただし、前掲『芭蕉句集の研究』では、『泊船集』において明らかに句形を誤っている句は、五七四句中二十五句で、従来言われてきたほど杜撰ではないと結論づけている（注7、p.21）。

（9）『芭蕉句集の研究』（注7）、p.23。

（10）『泊船集』の引用は、古典俳文学大系第六巻による。

（11）許六編『校正泊船集』や土芳編『蕉翁句集』はあるが、いずれも写本である。また、『芭蕉句集の研究』では、両者とも『泊船集』を土台とした本で、特に『校正泊船集』は十分に校正を果たしたものとは言えないとする（注7、p.44、p.53）。

（12）表1に取り上げた各句集の編者はその門流の高弟とはいいがたい例がほとんどだが、その理由については原因不明である。ただし、『野坡吟草』の編者風之・文下は書肆であり、それまでも野坡の俳書を刊行していた。よって、個人句集の編集もしやすかったものと思われる。表2に取り上げた句集の編者は、表1とは違い、各門の高弟が多いが、書肆が編者となった例は複数見られる。

（13）引用は、『元禄名家句選』（『普及版俳書大系』第十一巻）による。

（14）引用は、『蕉門俳諧続集』（『普及版俳書大系』第八巻）による。

（15）引用は、『元禄名家句選』（『普及版俳書大系』第十二巻）による。

（16）前出『俳文学大辞典』「句集」項では、『淡々発句集』を「故人の発句集」の例として取り上げる。しかし、同集は延享三年（一七四六）に序文が記されており、また、句集の内容からしても、宝暦十一年（一七六一）の没後に刊行されたと考える積極的な根拠がなく、誤りであろう。

（17）例えば蝶夢は、結局実現しなかったものの、句集『草根集』を寛政期に刊行予定だった（『蝶夢全集』）。樗良や几董

も同様であり、無名の作者のものも含めれば、かなりの数になるだろう。

(18) なお、作者本人がそこまでしたにも関わらず、のちに『吏登句集』(寛政五年〈一七九三〉刊)が編まれたことは、このころには句集の刊行が既に当たり前になっていたことの証左となろう。

(19) 引用は、『中興俳諧名家集』(『普及版俳書大系』第十九巻)による。

(20) 以下、『蓼太句集』の引用は、『蓼太全集』(『俳諧文庫』第十七編)による。

(21) 以下、『蘿葉集』の引用は、『也有全集』(『俳諧文庫』第六編)による。

(22) 引用は、『元禄名家句選』(『普及版俳書大系』第十二巻)による。

(23) 引用は、『蕪村暁台全集』(『俳諧文庫』第十二編)による。

(24) 寺島徹「板本『枇杷園句集』の成立—自筆稿本『甲寅秋 枇杷園句集』との関連をめぐって—」(『近世文芸』第六十四号)参照。

(25) 例えば、成美の句集『成美家集』は、表向きは息や久蔵らの編であるとされているが、実際は自撰集であったと言われている(『俳文学大辞典』「成美家集」項)。

(26) 大江丸の句集『俳懺悔』の天府による序文に、「初めの筆とらんやといなむべき事ながら蓼師の需に応ず」とある。

(27) このような合同句集が後世に与えた影響も大きいだろう。例えば、子規は『獺祭書屋俳句帖抄』(俳書堂、1902)序文において、明治二十四年ごろ、『猿蓑』とほぼ同時期に『三傑集』(『発句三傑集』。闌更・暁台・蓼太の合同句集)を読んで、影響を受けたと述べている(p.12)。

付記:本稿は、京都近世小説研究会令和三年四月例会(オンライン)における発表「個人句集概説」に基づくものであり、席上では様々なご意見を賜った。深く感謝する。ただし、個人句集の概観というテーマは、その性質上、多人数の英知を結集させなければ深まらないものであり、現状の認識にはまだまだ不十分な点が存在するだろう。ますます積極的なご叱正をお願いしたい。

(みはら なおこ/本学大学院生)

表1　蕉門における主要な個人句集一覧

句集名	刊年（序跋執筆年含む）	作者	没年	編者	備考
五元集	延享四年（一七四七）	其角	宝永四年（一七〇七）	旨原	四巻中二巻が発句集
玄峰集	寛延三年（一七五〇）	嵐雪	宝永四年（一七〇七）	旨原	
蓮二吟集	宝暦五年（一七五五）	支考	享保一六年（一七三一）	一浮	
野坡吟草	宝暦九年（一七五九）	野坡	元文五年（一七四〇）	風之・文下	
去来発句集	安永三年（一七七四）	去来	宝永元年（一七〇四）	蝶夢	『丈草発句集』とセット（上巻）
丈草発句集	安永三年（一七七四）	丈草	宝永元年（一七〇四）	蝶夢	『去来発句集』とセット（下巻）
杉風句集	天明五年（一七八五）	杉風	享保一七年（一七三二）	梅人	
桃隣句選七巻集	文化元年（一八〇四）	桃隣	享保四年（一七一九）	四世桃隣	連句七巻収録。桃隣百回忌追善
惟然坊句集	文化九年（一八一二）	惟然	正徳元年（一七一一）	秋挙	
北枝発句集	天保三年（一八三二）	北枝	享保三年（一七一八）	北海	
五老井発句集	天保五年（一八三四）	許六	正徳五年（一七一五）	山蔭	
浪化上人発句集	慶応元年（一八六五）	浪化	元禄一六年（一七〇三）	野鶴	

表2　中興期前後の作者たちの主要な個人句集一覧

句集名	刊年（序跋執筆年含む）	作者	没年	編者	備考
くち葉	不明（備考欄参照）	祇空	享保十八年（一七三三）	戸外	三回忌（一七三五）～七回忌（一七三九）の間に刊行
麦林集	不明（備考欄参照）	乙由（麦林）	元文四年（一七三九）	麦浪	元文四年（一七三九）～延享五年（一七四八）の間に刊行
淡々発句集	延享三年（一七四六）	淡々	宝暦十一年（一七六一）	分外	生前の刊行。続編あり
桑々畔発句集	寛延二年（一七四九）	貞佐	享保十九年（一七三四）	有佐ら	
夜半亭発句帖	宝暦五年（一七五五）	巴人	寛保二年（一七四二）	雁宕ら	巴人十三回忌追善
千代尼句集	宝暦十四年（一七六四）	千代尼	安永四年（一七七五）	既白	生前の刊行。続編『松の声』
古来庵発句集前篇	明和三年（一七六六）	存義	天明二年（一七八二）	図大	生前の刊行。還暦記念
蘿葉集	明和四年（一七六七）	也有	天明三年（一七八三）	達下	生前の刊行。拾遺編あり
蓼太句集	明和六年（一七六九）	蓼太	天明七年（一七八七）	吐月	生前の刊行。続編あり
俳諧而形集	明和九年（一七七二）	二世平砂	天明三年（一七八三）	二世平砂	生前の刊行。個人句集のうち最大のものとされる
蕪村句集	天明四年（一七八四）	蕪村	天明三年（一七八三）	几董	『蕪村自筆句帳』が基となっている。蕪村一周忌追善
樗良発句集	天明四年（一七八四）	樗良	安永九年（一七八〇）	甫尺	元は生前刊行予定だった。拾遺編あり
半化坊発句集	天明七年（一七八七）	闌更	寛政十年（一七九八）	車蓋	生前の刊行